

「まちとくらしの文化祭」@赤羽台

2024年
まちとくらしのトライアルコンペ


～想い、知恵、工夫を持ち寄って
「このまちに暮らす幸せ」をみんなで作る～

◇企画内容

わたしたちのまち北区には、それぞれの想いを胸に、趣味や特技を活かして、さまざまな視点から地域のまちづくりに取り組むグループが数多くあります。(右欄参照)

この企画は、そうしたグループが集まり、日頃の活動の成果を披露する場を創ります。「飲食」「物販」「パフォーマンス」「研究発表」「討論会」「相談会」何でもあり。人のため、まちのため、やりたいことを持ち寄ってつながりあうイベントです。まさにこれは、誰もが一度は経験したことのある学校の「文化祭」。

名づけて「まちとくらしの文化祭」これって赤羽らしくありませんか？

いつ (開催日)	2024年の秋 ※東洋大学赤羽台キャンパス大学祭「赤羽台祭」と同時開催。大学生にも「まちとくらしの文化祭」に参加してもらい、集客アップ・満足度アップの相乗効果を図ります。 ※年に一度の恒例イベントとして、継続的に開催します。
どこで	まちとくらしのミュージアムすべてを使います ※屋外空間(ワークショップ広場)は「校庭」ラボ41やスターハウスの住戸は「教室」ミュージアム全体をひとつの「学校」に見立てて開催します。 ※「Hintmation」も一緒に使えたら最高。  ミュージアム全体が学校
誰に向けて	「文化祭」には、ヌーベル赤羽台に暮らす人たちに加えて、周辺地域に暮らす多くの方々にも「文化祭」を訪れてもらいます。 ※参加する人との交流が生まれ、新たな仲間や発想が生まれ、新しいこのまちの文化が生まれます。
どのように 行うか	実行委員会形式による企画・運営 ※「文化祭に参加するグループの有志」「文化祭の趣旨に賛同する個人」「支援事業者」「URまちとくらしのミュージアム」による「赤羽台まちとくらしの文化祭実行委員会」を組織します。提案者も参画します。 ※実行委員会で企画や運営方法について相談しながら手づくりで実施します。

◇このまちで多様なまちづくりの活動に取り組むグループ

マルシェを開催し、かつての宿場町の活性化に取り組むグループ

地域のイベントやニュースを動画で配信し、街を元気にしようとしているグループ

参加者とフィールドワークをしながら、「水害」をテーマにした演劇を創作して発表するグループ

駅前やお寺にピアノを設置し、ストリートピアノで多世代交流を目指すグループ

お菓子づくりなどの趣味や特技を活かして創業を目指す人をマルシェ開催で支援するグループ

夏休みに子どもたちに農業体験してもらおうと、バスツアーを行うグループ

子どもたちの薬物乱用防止のために「ライフスキル」ワークショップに取り組むグループ

重度心身障がい児が食べるきざみ食を飲食店のメニューとして置いてもらうことに取り組むグループ

銭湯を核とした地域の歴史や文化を発信し、多世代間の地域コミュニティの再生を目指すグループ

産後女性の筋力回復と啓発、疾病予防に取り組むグループ

産前産後の母親を対象に子育てのオンラインアドバイスを行い、育児不安や産後うつ軽減を目指すグループ

ポールウォークの実践を通して、楽しみながら健康寿命の延伸に取り組むグループ

※紹介したグループには了承がとれていないため、個人名や団体名、画像の掲載は控えさせていただきました。

◇提案の主旨

生まれ育った東京北区で「協働地域づくり推進事業選定委員」をさせていただいております。北区には「北区地域づくり応援団事業」「北区政策提案協働事業」という区民の活動支援があります。前者は、まちづくりの新しい担い手の裾野を広げることを目的に、NPOやボランティア団体等が行う地域づくりのプロジェクトに区が助成する事業。後者は、地域の様々な課題を解決していくための事業をNPOやボランティア団体等が提案し、3年間の助成を受けながら、区と協働で実施する事業です。協働地域づくり推進事業選定委員は、それらを選定する委員です。

足掛け6年間で数多くの提案に触れてきました。比較的子育て、高齢者福祉の分野が多いものの、スポーツ系やイベント系などもあり、実に多様です。暮らしの身近なところに、様々な住民のアクションがあり、その一つひとつに提案者の強い思いがあることを肌で感じます。でも一つ課題があります。それはそれぞれの活動のつながりが弱いこと。

ひとつひとつの活動が相互につながり、賛同者が増えることによって活動に磨きがかかる。新しい発想も生まれ、もっともっとまち全体が良くなり楽しくなると感じています。そのためには、それぞれのアクションを「つなぎ」「後押し」をして「新たな価値をつくる」ことができる地域独自の仕組みや機会が必要です。

今回の提案は、永年このまちで集まって暮らすことの価値や文化を支えてきたUR都市機構、いわゆるテーマ型の活動グループ、地域住民のそれぞれにメリットがある夢のある物語です。